

現代の国語 学習プリント

6／10.56／24放送 原研哉「美意識は資源である」

作成…山木早苗

【第1パート 導入部】

成田空港に降り立ち、そっけない空間を入国審査所に向かって歩き始めるとき、決まって感じることもある。空間はおもしろみがなく無機質だが、なんとすばらしく掃除の行き届いた場所だろうか。床のタイルはどこもピカピカで、床の上で転がりまわってもさして服は汚れないのではないかと思うほど。カーペットを敷き詰めた床も清潔だ。仮にしみがあっても、それを除去しようと最善の努力を払った痕跡がある。恐らく掃除をする人は、仕事の終了時間が来ても、モップや掃除機をさっさと片づけたりしないで、切りのいいところまで仕事をやりおおせて帰るに違いない。この丁寧さが、他国から帰ってくると切実に感じられる。空港を出てくるまで高速道路を走り始めてもこの感覚は持続する。田園風景を切り裂いて進む景観に高揚感はないが、路面は鏡のように滑らかで、車のエンジン音もきわめて静かだ。道路に沿って点灯する街路灯も、どれ一つとして消えていたりはいらない。

その感慨はやがて都心部の夜景に吸い込まれていく。東京に近づくにつれ、夜景の緻密さに感覚が引き締まってくるようだ。一つ一つどの明かりも、切れたり明滅したりはしていない。ゆるぎなく灯っている。そんな明かりが集合して高層ビルとなり、果てしない奥行きの中に連なっておびただしい光の堆積をなす。

今の東京の夜景は、世界で一番美しい。そういう感想を漏らすと、異議を唱える人は少なからずいる。夜景はやっぱりムンバイですとか、香港のヴィクトリアピークから見下ろす夜景にはかなわないなどと、うるさ方の意見は百出するけれど、同意してくれる人は案外と少ない。やはり、思い過ごしかもしれないと思い始めていた矢先、都市をテーマとしたテレビのドキュメンタリーで、世界の空を飛び回るパイロットたちの言葉が紹介されていた。

「今、上空から眺めて一番きれいな夜景は東京」

世界の夜景を機上から眺め続けている人々の意見だけに説得力がある。まさに我が意を得た思いがした。世界広しといえども、東京ほど広大な広がりを持つ都市はないし、信頼感あるひとつひとつの明かりがそういう規模で集結しているわけである。このあたりに僕はひとつの確信を持つ。

【第2パート 展開部】

掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、明かりを管理する人も、すべて丁寧な誠実にしごとをしている。あえて言葉にするなら「繊細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

これは海外では簡単に手に入らない価値観である。パリでも、ミラノでも、ロンドンでも。たとえば展示会の会場ひとつ日本並みの完成度で作ろうとするなら、その骨折りは並大抵ではない。基本的に何かをより丁寧にやろうという意識が希薄である。労働者は時間がくれば作業をやめる。品質を向上させようという意欲よりもマイペースを貫く個の尊厳が仕事に優先するのであろう。それを前提に、管理する側がほどよく制御して仕事を進めていく。確かに、ヨーロッパでは職人氣質（かたき）というものが存在するが、日常の掃除や、展示会場の設営などは、職人氣質のおよぶ範囲ではないのかもしれない。さらに言えば、こうした普通の環境を丁寧にしつらえる意識は作業をしている当人たちの問題のみならず、その環境を共有する一般の人々の意識のレベルにもつながっているような気がする。特別な職人の領域だけに、高邁（こうまい）な意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体で暗黙のうちに共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。

ものづくりに必要なのは、まさにこの「美意識」という感覚資源ではないかと僕は最近思い始めている。これは決して比喻やたとえではない。ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性があるこそ、ものはその文化の中ではぐくまれ成長する。まさに美意識こそものづくりを継続していくための不断の資源である。しかし一般にはそう思われていない。資源といえば、まずは物質的な資源のことを指す。

そもそも、日本は天然資源に恵まれていない。そのため、工業製品を生み出すために「技術」を磨かざるを得なかった。戦後の高度経済成長は、そのような構図でものづくりを進めてきた成果である。世界はそう認識しているし、日本人もそう思ってきた。戦後の日本が得意とした工業生産は、「同一規格大量生産」、つまり均一にたくさん製品を作ることをきわめて安定した水準で達成することであった。さらに、製品を小型化する凝縮力のようなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功したのである。しかし、もしも日本に豊かな天然資源が存在していたら、今日のような量を前提とした室に凝縮性が備わった工業製品を作り出すことのできる高度な技術を獲得することはなかったはずである。

しかしながら、ここで言う高度な「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔なものづくりを遂行することであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。つま

り、今日において空港の床が清潔に磨きあげられていたり、都市の夜景をなす灯りのひとつひとつが確実に光を放つことの背景にある同じ感受性が、同一規格大量生産においても働いていたのではないかと考えられる。高度な生産技術やハイテクノロジーを走らせる技術の、まさの先端を走る資源が美意識であるという根拠はここにある。

【第3パート 論拠部】

日本は石油や鉄鉱石という天然資源に乏しい。この事実が歴史の重要な局面でこの国の方針に大きく影響し、第二次大戦に日本が歩みを進めてしまった要因のひとつもここにある。しかし、今日においては、天然資源の確保に汲々としてきたことがむしろプラスに転じはじめている。もしも日本に石油が豊富に湧き出ていたら、おそらくは自然環境や省エネルギーに対する意識は今日ほどには高まっていなかったはずだ。周囲を海に囲まれ、その大半が山であるという恵まれた自然も、湧き出る石油や排ガスによって後戻りできないほどにぼろぼろに汚染されていたかもしれないし、地球温暖化をもたらす二酸化炭素の排出を抑制すべく、中国やアメリカが必死で説得するような事態を迎えていたかもしれない。マネーという富はもっと巨大にこの国に蓄えられ、医療も、教育も、通信も、全て無料で国が提供するような裕福な国になっていたかもしれないが、その豊かさは、やがて訪れる次の時代に対応できず、悲惨な衰退を運命づけられていたかもしれない。

こう考えると、天然資源がないということは、実は日本にとって幸いなことであったのだ。天然資源は今日、その流動性が保証されている世界においては買うことができる。オーストラリアのアルミニウムも、ロシアの石油も、お金を払えば買えるのだ。しかし、文化の根底で育まれてきた感覚資源は、お金で買うことはできない。求められても輸出できない価値なのである。

冷静にみると、日本の工業製品は、つましさやエネルギー消費の視点、そして消費者の成熟にともなう製品の洗練という点で、すでに優位性を発揮しはじめている。世界同時不況のせいで少し見えにくくなっているが、日本の自動車メーカーがひととき世界一の販売台数を記録したのもその一端である。生活者の意識も、省エネルギーや環境に対する負荷の軽さを前向きに受け止めるようになり、暮らしの、目に見えない中心に、過剰を避け、節度をわきまえていく志向や理性をひそやかに宿らせているのである。

【第4パート 結論部】

今日、僕たちは、自らの文化が世界に貢献できる点を、感覚資源からあらためて見つめなおしてみてはどうだろうか。そうすることで、これから世界が必要とするはずの、つましさや合理性をバランスよく表現できる国としての自意識をたずさえて、未来に向かうことができる。

生産技術は現在、アジア全域、そして世界全域に等しく広がっていく時代を迎えている。自国におけるものづくりの空洞化を憂えている暇はない。多く売るために作れるだけ作るという時代が去った今、ものの生産においては、量よりも質へと、はっきりと重心を移していくことを考えなくてはならない。さらには、工業生産と同時に、恵まれた自然環境にも目を向け、サービスや*₁ホスピタリティの局面にも資源としての美意識を振り向けていくことが重要である。そうすることで、自然をハイテクノロジーと感性の両面から運用できる。新しいタイプの環境立国として日本はその存在を示していくことができると思うのだ。石油は産しないが、温泉はいたるところに湧き出ている。住まいやオフィスの環境も、*₂モビリティや通信文化の洗練も、医療や福祉の緩やかさも、ホテルやリゾートの快適さも、美意識を資源とすることで、僕は経済文化の新しいステージに立つことができるはずだ。

中国、そしてインドの台頭はもはや前提として受け入れよう。アジアの時代なのだ。僕は高度成長の頃より、いつしかGDPを誇りに思うようになっていたが、そろそろ、その呪縛から逃れる時が来たようだ。GDPは人口の多い国に譲り渡し、日本は現代生活において、さらにそのずっと先を見つめたい。アジアの東の端というクールな位置から、異文化との濃密な接触や軋轢を経た後にのみ到達できる極まった洗練をめざさなくてはならない。

技術も生活も芸術も、その成長点の先端には、微細に打ち震えながら世界や未来を繊細に感知していく感受性が機能している。そこに目をこらすのだ。世界は美意識で競い合っこそ豊かになる。

(注釈)

*1 「ホスピタリティ」：客を親切にもたらすこと

*2 「モビリティ」：移動性。動きやすさ。ここでは、人やものが空間を移動することを指す